読売歌壇

小池光 選

四歳のわれら双子の写真出づ男の子なれども手をつなぎをり　行田市　永沼規美雄

【評】四歳のときのわれら双子の兄弟の写真が出てきた。男の子だがしっかり手をつなぎあっている。それから二人は、それぞれどういう人生を歩んだか。ふと知りたくなる。

羽化終へるも片側の翅伸びぬ蟬地面をぐるぐる回る哀しさ　宇都宮市　大門とよ子

【評】すべての蟬が羽化に成功するとは限らず、こういう状態になる蟬もいる。ぐるぐる地面を回るのみで、飛べない。いかにも可哀想だ。これが自然というものなのだが。

「運転手募集」と書かれたバスが行く葉月の強き陽射しの中を　千葉市　佐藤綾子

【評】乗り物はあるのだが、運転する人が足りない。横腹に大きく「運転手募集」と書いたバスが行く。真夏の陽射しが降りそそぐ中。

兵たりし父の詠みたる漢詩を低く吟ずる八月の空　町田市　小堀正伸

宵闇に口笛聞こえ耳すます道行く人のサントワマミー　大阪市　大和田芳美

秘密めく風鈴の音に聞きゐれば少年兵の涙のごとし　成田市　神郡一成

熱海富士に似る大男百均に風鈴見おり土用丑の日　さいたま市　小平英治

夏帽子かぶれる犬とすれ違ふ遊歩道には蟬の声満つ　岡山市　岩藤由美子

戦死した父のつけたという「光子」枯れることなき一輪のことば　横浜市　三上光子

アリさんが一匹二匹とあるきをりふまずに行こうゴミ出しの朝　仙台市　若生和子

栗木京子 選

本震がいつ来るのかと怯える日乗り越えて来た十年だけど　熊本市　甲賀亨子

【評】七月二十八日に大きな地震に襲われた熊本県。十年前の大地震の折に断層の存在が指摘されていたのだが、備えはできても被災そのものを止めることはできない。歌の背後から苦渋が伝わる。復旧を祈っています。

登山靴は捨てたけれども三十年使いし杖は次の出番へ　糸島市　原田サツ子

【評】登山のときに愛用していた靴と杖。年齢を重ねて登山をすることはなくなったが、杖は日々の歩行に役立つ。結句が明るい。

土産屋で「おそろにしよう」と子が誘うおそろにすれば二十歳の気分　熊谷市　茂出木智子

【評】「おそろ」は「お揃い」のこと。揃いの物を身に付ければ気分が高まる。二十歳の子の感性に作者が寄り添ったのが若々しい。

ブロッケンの光輪のなかの我が影に合掌したり北岳の夕　京田辺市　佐々木英夫

七月の夕方は未だ明るくてこれから何をしようか思案す　東京都　広瀬清信

暑がりの母のためにと掛ける水汗拭くように撫でる墓石　奈良県　松本悦子

スニーカー真白になりぬ海沿ひの刑務所製の蒼き石鹼　横浜市　北見美保

窓ぎわに蟬のぬけ殻せつなくて単身赴任はくり返される　古賀市　砂山ふらり

子育てを終へし娘の飼ふ金魚八年生きて心ささへる　前橋市　近藤周雄

満開のひまわり畑の迷路行くあの角曲がればゴッホがいるか　和歌山市　溝口圭子